書字におけるプライベートスピーチの記述

○石本啓一郎¹・京相雅樹² (非会員)

(¹立教大学大学院文学研究科・²東京都市大学工学部)

キーワード: プライベートスピーチ, 文字と思考, デジタルペン

Describing Children's Private Speech during Writing

Keiichiro ISHIMOTO¹ and Masaki KYOSO^{2,*}

(¹Graduate School of Arts, Rikkyo Univ., ²Faculty of Engineering, Tokyo City Univ.)

Key Words: Private Speech, Literacy and Thinking, Digital Pen

目 的

言語的思考は文字の読み書きとともに発達すると考えられ、両者の発達上の関係が検討されてきた。幼児のつぶやきは言語的思考の一形態であり「プライベートスピーチ (PS)」と呼ばれるが、幼児の PS は書字の発生と共にどのように変化するのだろうか。石本・石黒 (印刷中) は、3-7 歳児を対象に「メモかき課題」を実施し、文字を産出した子どもにのみ呈示文中の音韻を一音ずつ区切った PS が見られ、その他の絵画や線画を産出した子どもにはそのような PS が見られなかったと報告している。つまり、音韻を一音ずつ区切った PS は、書字以外のかく行為においては見られず、書字発生とともに新しい種類の PS が生まれることが示唆される。しかし、書字における PS のタイプやその発達については不明な点が多い。本研究では、デジタルペンを用いて「メモかき課題」を実施し、幼児の書字中の PS を詳細に記述することにした。

方 法

実験参加者 東京都内の公立保育園に在籍する幼児 20 名 (平均年齢 5 歳 10 ヶ月 (5 歳 4 ヶ月～6 歳 3 ヶ月))。

材料と装置 紙面上にインクの線を残すタイプのデジタルペン (Anoto 製 DP-201) と専用紙 (A4 判) を使用した。単一指向性マイクを装着した IC レコーダーと、三脚で固定したビデオカメラを子どもの前方に設置し、実験の全過程を記録した。

手続き 実験は個別におこない、練習課題のあとメモかき課題をおこなった。メモかき課題は、[a] メモかき場面と [b] メモを見て思い出す場面からなる。[a] メモかき場面では、実験者が子どもに「さっきと同じように、これから言う文を後で思い出すようにこの紙に書いてください」と指示し、メモが出来るようにペンと紙を渡し、8 文を読み上げて呈示した。子どもが 8 文目をメモし終えた後、[b] メモを見て思い出す場面に入り、「今言ったことを最初から教えてください」と指示した。子どもが一通り思い出した後、言及していないメモがあった場合は「これは何でしたか?」「これは?」と指さして尋ね、呈示文を思い出すように求めた。呈示文は、相互に関係の無い簡潔な状況記述文であった。

分析 (1) メモかき課題において産出されたインスクリプションの形態は、石本・石黒 (印刷中) の定義に基づいて分類された。多様なインスクリプションが産出されたが、本研究では、「正規配列文字」(＝呈示文と関連があり、直線的に配列された、文字形態に組み合わせられた線。)と「非正規配列文字」(＝呈示文と関連があるが、直線的に配列されていない、文字形態に組み合わせられた線。一文字のみを含む。)の産出過程に焦点化した。(2) その上で、子どもが文字を産出する過程を、デジタルペンで記録された一筆ごとの時間情報 (一筆の開始時点と終了時点) と、IC レコーダーで記録された発話の音声情報を並べて記述した。

結 果

「正規配列文字」または「非正規配列文字」を一回以上産

出した子どもは 10 名いた。呈示文を文字で書く過程で 10 名中 10 名全員が、呈示文に含まれる音韻を一音ずつ区切って発話していた。Fig 1 は、その中の一人の男児 (6 歳 3 ヶ月) が呈示文に含まれる音韻を発話しながら文字を書く行為を記述したものである。実験者が呈示文 (Fig 1 では「たくさんの星がきらきらと光っています」) を読み終えた時点 (0 秒) として、その後の経過を記述した。Fig 1 ののはじまりは 35 秒時点である。この子は、この時点で既に書き終えていた三文字を「た、く、さ」と読み上げてから、「ん」と発話した直後に「ん」を書き始めた。それを書き終えると、実験者に対して呈示文の再呈示を求めてから、「たくさん」と再度既に書いた文字を読み上げ、「の」と発話してから「の」を書き始めた。それを書き終えると、「ほ」と発話してから「ほ」を書いた。

考 察

幼児の書字中の PS を詳細に記述した結果、書字中の PS には、(I) すでに書いた文字を読み上げる発話 (例えば、Fig 1 の「た、く、さ」「たくさん」) と、(II) これから書く文字についての発話 (例えば、Fig 1 の「ん」「の」「ほ」) という、書字に対して時間的順序の異なる二つのタイプの発話が見られた。文字を書いた 10 名中 8 名に、この両方の PS が見られた。残りの 2 名には、II の PS のみ見られた。言語的思考と書字の関係を検討するために、これらの PS が書字の発達とともにいかに変化していくのか検討する必要がある。

Fig 1 幼児の文字産出行為と発話

(注) 男児 (6 歳 3 ヶ月) が呈示文「たくさんの星がきらきらと光っています」を書いている時の文字産出行為と発話を 0.2 秒単位で記述した。上から順に、文字ごとの産出開始時点・終了時点、一筆ごとの産出開始時点・終了時点、子どもの発話の開始時点・終了時点に記載した。実験者 (E) の発話も併記した。

引用文献

石本啓一郎・石黒広昭 (印刷中). 媒介手段としての文字はどのように生まれるのか—インスクリプションに媒介された行為の発達— 教育心理学研究